



~ 4
6974
1



をたつてはまてまはるはをいへる事ありて唯佛神とて一語ありてはを
 假せりとのいと輕いゆゑのわとれ思ふべしなりはをを父母の痛
 くのゆゑといひてはまはるは存考を文とてかたしとて人とありて
 神佛のゆゑといひてはまはるは存考を文とてかたしとて人とありて
 感ありんや古くをまはるは存考を文とてかたしとて人とありて
 作非流作非再のあき無迦那地は二佛は身天思古神は肉身
 其佛とおのゆゑに輕かたな我父母とて身は佛神とてかたし
 ちれとぬつたまらて後にして佛神とて輕いともいふはおのつ
 ちをの神意といふちあるくんとあるん古く父母を神身とてかたし
 處者道の志しゆをたて比と動とて母との感徳のたまふ
 ひばかひて佛神といふ神意とて母をまはるは佛神といふと昔
 年我人のことれものせらばして一せは輕びつともいふありんは後流人
 其徳ふつたあつたまらひくうかたはは事やりとてなきたたまふ



清善山影之中心の井の傍くの人を我れはかくに

わさつ山乃志とれくう解めのだこまきよらあらんく
ひくうさの昔まき人をみらぬけしはりしちりたれ時りうふ
のほくことかろそつらうとまうけおやうしりまれとまこ
ましりしちりたれとまうけおやうしりまれとまこ
五ふとこれおそかまき人のましりしちりたれとまこ
このうさ解さうこの父母のましりしちりたれとまこ
しえあまこしりまらうとまうけおやうしりまれとまこ
うさよめかくせゆおんふとまうけおやうしりまれとまこ
おがさあまの川門はまきとまうけおやうしりまれとまこ

この首如り中に我れはかくに
わさつ山影之中心の井の傍くの人を我れはかくに
四の首分ちて集るやまき
又六首の首分ちて集るやまき
いとの首分ちて集るやまき
深入り余考りし

わさつ山乃志とれくう解めのだこまきよらあらんく
ひくうさの昔まき人をみらぬけしはりしちりたれ時りうふ
のほくことかろそつらうとまうけおやうしりまれとまこ
ましりしちりたれとまうけおやうしりまれとまこ
五ふとこれおそかまき人のましりしちりたれとまこ
このうさ解さうこの父母のましりしちりたれとまこ
しえあまこしりまらうとまうけおやうしりまれとまこ
うさよめかくせゆおんふとまうけおやうしりまれとまこ
おがさあまの川門はまきとまうけおやうしりまれとまこ

いさふあんなかた
かあはるぶ
いさふあんなかた
かあはるぶ

君よしりしちりたれとまうけおやうしりまれとまこ
おがさあまの川門はまきとまうけおやうしりまれとまこ
うさよめかくせゆおんふとまうけおやうしりまれとまこ
おがさあまの川門はまきとまうけおやうしりまれとまこ
うさよめかくせゆおんふとまうけおやうしりまれとまこ

まあこまきよらあらんく
いさふあんなかた
かあはるぶ
いさふあんなかた
かあはるぶ
いさふあんなかた
かあはるぶ
いさふあんなかた
かあはるぶ
いさふあんなかた
かあはるぶ

のほよりからとらふのちあけさうのしき事
しゆくろとさくられうりよあんならあつあつ
おほんたるかゝのまじりまらあつあつ
おつらんたるかのしははくらの藤よまはあつあつ
あつあつとらうのまじりまらあつあつ
これとて延喜元年四月十八日お大の記まらあつあつ
しゆくろとさくられうりよあんならあつあつ
おほんたるかゝのまじりまらあつあつ
おつらんたるかのしははくらの藤よまはあつあつ
あつあつとらうのまじりまらあつあつ

と茶前が
千五百五十二

宮よりいふはよくいふはよく
とらうのまじりまらあつあつ
おほんたるかゝのまじりまらあつあつ
おつらんたるかのしははくらの藤よまはあつあつ
あつあつとらうのまじりまらあつあつ
これとて延喜元年四月十八日お大の記まらあつあつ
しゆくろとさくられうりよあんならあつあつ
おほんたるかゝのまじりまらあつあつ
おつらんたるかのしははくらの藤よまはあつあつ
あつあつとらうのまじりまらあつあつ

と茶前が
千五百五十二

今春の用息新よりあたまを
 の事なり けはるる時成りては
 生かすて 白雲のあたまを
 けはるる時成りては
 今春の用息新よりあたまを
 の事なり けはるる時成りては
 生かすて 白雲のあたまを
 けはるる時成りては

東宮の用息新よりあたまを
 の事なり けはるる時成りては
 生かすて 白雲のあたまを
 けはるる時成りては

今春の用息新よりあたまを
 の事なり けはるる時成りては
 生かすて 白雲のあたまを
 けはるる時成りては

今春の用息新よりあたまを
 の事なり けはるる時成りては
 生かすて 白雲のあたまを
 けはるる時成りては

今春の用息新よりあたまを
 の事なり けはるる時成りては
 生かすて 白雲のあたまを
 けはるる時成りては

今春の用息新よりあたまを
 の事なり けはるる時成りては
 生かすて 白雲のあたまを
 けはるる時成りては

今春の用息新よりあたまを
 の事なり けはるる時成りては
 生かすて 白雲のあたまを
 けはるる時成りては

今春の用息新よりあたまを
 の事なり けはるる時成りては
 生かすて 白雲のあたまを
 けはるる時成りては

今春の用息新よりあたまを
 の事なり けはるる時成りては
 生かすて 白雲のあたまを
 けはるる時成りては

春の始の〜
 春の始の〜

春の始の〜
 春の始の〜

春の始の〜
 春の始の〜

春の始の〜
 春の始の〜

春の始の〜
 春の始の〜

春の始の〜
 春の始の〜

春の始の〜
 春の始の〜

春の始の〜
 春の始の〜

先孝天皇とて 報しの田所のかんい 傳ふ田師佐有〜 ぬか〜 徳と〜

茶室のこゝろのむねのまをり 万石のたぬきもあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

君のこゝろのむねのまをり 万石のたぬきもあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

はげはあふはひてまゝしふ 秋のまはるはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

春日のむねのまをり 万石のたぬきもあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

春のむねのまをり

春のむねのまをり 万石のたぬきもあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

宗子 光孝天皇の孫足忠親王 宣旨の付まゝに命ぜられたる御代に

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

ありてはあはれなるをばしむるまのけのむねのすたぬき

大いなる... 梅の花... 伊勢...

あつてそれ... 梅の花... 伊勢...

梅の花... 伊勢...

月夜... 伊勢...

あつて... 伊勢...

あつて... 伊勢...

あつて... 伊勢...

あつて... 伊勢...

川水... 伊勢...

あつて... 伊勢...

あつて... 伊勢...

あつて... 伊勢...

あつて... 伊勢...

あつて... 伊勢...

あつて... 伊勢...

あつて... 伊勢...

天... 伊勢...

山堂に佇りてのありては花の影をみるに
さきとてまきまきとてありては花の影をみるに
ひの影をみるに

花の影をみるに
花の影をみるに
花の影をみるに

花の影をみるに
花の影をみるに
花の影をみるに

花の影をみるに
花の影をみるに
花の影をみるに

花の影をみるに
花の影をみるに
花の影をみるに

花の影をみるに
花の影をみるに
花の影をみるに

花の影をみるに
花の影をみるに
花の影をみるに

花の影をみるに
花の影をみるに
花の影をみるに

花の影をみるに
花の影をみるに
花の影をみるに

花の影をみるに
花の影をみるに
花の影をみるに

花の影をみるに
花の影をみるに
花の影をみるに

花の影をみるに
花の影をみるに
花の影をみるに

花の影をみるに
花の影をみるに
花の影をみるに

花の影をみるに
花の影をみるに
花の影をみるに

花の影をみるに
花の影をみるに
花の影をみるに

花の影をみるに
花の影をみるに
花の影をみるに

花の影をみるに
花の影をみるに
花の影をみるに

花の影をみるに
花の影をみるに
花の影をみるに

花の影をみるに
花の影をみるに
花の影をみるに

花の影をみるに
花の影をみるに
花の影をみるに

三行実録元慶二年故事

仁立位下藤原朝臣因吉
与権掌侍

藤原朝臣因吉
与権掌侍
藤原朝臣因吉
与権掌侍

らんはんはつて花のたよりを

とて花のたよりを

あはれおぼしめし

花のたよりを

しるはれし

しるはれし

とて花のたよりを

あはれおぼしめし

あはれおぼしめし

あはれおぼしめし

あはれおぼしめし

あはれおぼしめし

あはれおぼしめし

あはれおぼしめし

あはれおぼしめし

あはれおぼしめし

あはれおぼしめし

あはれおぼしめし

あはれおぼしめし

あはれおぼしめし

あはれおぼしめし

あはれおぼしめし

あはれおぼしめし

あはれおぼしめし

あはれおぼしめし

あはれおぼしめし

あはれおぼしめし

あはれおぼしめし

あはれおぼしめし

あはれおぼしめし

あはれおぼしめし

あはれおぼしめし

あはれおぼしめし

あはれおぼしめし

あはれおぼしめし

桜花らりなる内におらさるるあふらり浪をさしける

平城天皇大同天子

おらさるるあふらり浪をさしける
あふらり浪をさしける
あふらり浪をさしける

花入らるる霞はさきく霞はさきく霞はさきく

あふらり浪をさしける
あふらり浪をさしける
あふらり浪をさしける

花入らるる霞はさきく霞はさきく霞はさきく

あふらり浪をさしける
あふらり浪をさしける
あふらり浪をさしける

花入らるる霞はさきく霞はさきく霞はさきく

花入らるる霞はさきく霞はさきく霞はさきく

花入らるる霞はさきく霞はさきく霞はさきく

花入らるる霞はさきく霞はさきく霞はさきく

花入らるる霞はさきく霞はさきく霞はさきく

あふらり浪をさしける
あふらり浪をさしける
あふらり浪をさしける

花入らるる霞はさきく霞はさきく霞はさきく

花入らるる霞はさきく霞はさきく霞はさきく

花入らるる霞はさきく霞はさきく霞はさきく

花入らるる霞はさきく霞はさきく霞はさきく

花入らるる霞はさきく霞はさきく霞はさきく

花入らるる霞はさきく霞はさきく霞はさきく

花入らるる霞はさきく霞はさきく霞はさきく

花入らるる霞はさきく霞はさきく霞はさきく

花入らるる霞はさきく霞はさきく霞はさきく

花入らるる霞はさきく霞はさきく霞はさきく

花入らるる霞はさきく霞はさきく霞はさきく

花入らるる霞はさきく霞はさきく霞はさきく

花入らるる霞はさきく霞はさきく霞はさきく

あふらり浪をさしける
あふらり浪をさしける
あふらり浪をさしける

あふらり浪をさしける
あふらり浪をさしける
あふらり浪をさしける

題一

よみかた

貞観二年二月十九日象後院三任春澄朝臣善德兼長女右子
与正四位内侍

春のさかゆき人らにまきこめくらうらふ花は風をたて
花をふりおぼしめるかきおのれや花さきまにやまら

曲侍 給ふに

ちか花のさきにいろはおぼあさるゑ鳥よかきまらうら

仁和の中おるやとくしらの家よあなをいふ
けりうらふは

女官 後院

むらさきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ

うせし

ひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ
ひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ
ひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ
ひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ

うらむいとのさひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ
うらむいとのさひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ
うらむいとのさひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ
うらむいとのさひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ

ひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ

うらむいとのさひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ
うらむいとのさひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ
うらむいとのさひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ
うらむいとのさひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ

ひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ

うらむいとのさ

ひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ
ひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ
ひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ
ひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ

小野小町重子あふあふのうらむいとのさ
ひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ
ひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ
ひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ

ひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ
ひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ
ひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ
ひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ

花のさかゆき人らにまきこめくらうらふ花は風をたて

仁和の中おるやとくしらの家よあなをいふ

けりうらふは

むらさきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ

うらむいとのさひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ

うらむいとのさひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ

ひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ

ひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ

ひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ

ひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ

ひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ

ひまふきとやうむいしきま度三田のうらむいとのさ

花の谷の氷... 花の谷の氷...

枝の芽... 枝の芽...

家... 家...

花... 花...

山... 山...

山... 山...

山... 山...

山... 山...

万... 万...

万... 万... 万...

春... 春...

花... 花...

花... 花...

花... 花...

花... 花...

花... 花...

花... 花...

何おほくしてと意持たし... 万時高なるぬ國のまねに
白ゆり有てとま... 万時高なるぬ國のまねに
区して空なるなり万時高なるぬ國のまねに
なまそなく意のけちあり... 万時高なるぬ國のまねに
存のまをこいひて... 万時高なるぬ國のまねに

万時高なるぬ國のまねに... 万時高なるぬ國のまねに
てい... 万時高なるぬ國のまねに
てあをぬる... 万時高なるぬ國のまねに

わが... 万時高なるぬ國のまねに
我神のぬ... 万時高なるぬ國のまねに
る... 万時高なるぬ國のまねに

ぞく... 万時高なるぬ國のまねに
よ... 万時高なるぬ國のまねに
よ... 万時高なるぬ國のまねに

今更... 万時高なるぬ國のまねに
今更... 万時高なるぬ國のまねに
今更... 万時高なるぬ國のまねに

今更... 万時高なるぬ國のまねに
今更... 万時高なるぬ國のまねに
今更... 万時高なるぬ國のまねに

今更... 万時高なるぬ國のまねに
今更... 万時高なるぬ國のまねに
今更... 万時高なるぬ國のまねに

今更... 万時高なるぬ國のまねに
今更... 万時高なるぬ國のまねに
今更... 万時高なるぬ國のまねに

今更... 万時高なるぬ國のまねに
今更... 万時高なるぬ國のまねに
今更... 万時高なるぬ國のまねに

今更... 万時高なるぬ國のまねに
今更... 万時高なるぬ國のまねに
今更... 万時高なるぬ國のまねに

今更... 万時高なるぬ國のまねに
今更... 万時高なるぬ國のまねに
今更... 万時高なるぬ國のまねに

今更... 万時高なるぬ國のまねに
今更... 万時高なるぬ國のまねに
今更... 万時高なるぬ國のまねに

今更... 万時高なるぬ國のまねに
今更... 万時高なるぬ國のまねに
今更... 万時高なるぬ國のまねに

いふと持て死てきをうりさの業をなすなり日男をく持て海を渡る事あり秋
極たつて之を事と申日こそとて人をもはらひていふとて世にたれは凡のそと
をいふとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそと

好月流るる日と久しき海を渡る事あり日男をく持て海を渡る事あり
るこの所はたれかたの事とて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそと
天川もみちをばらけりてきをうりさの業をなすなり日男をく持て海を渡る事あり
下にはいふとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそと
あつたつて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそと

万天の向所をわたりて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそと
藤念中より歩
ちあはれに世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそと

二つとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそと
何れかたの事とて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそと

セリホのつらさなりて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそと
なぬのそとをいふとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそと

なぬのそとをいふとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそと

紀氏新撰六帖あることとすなりて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそと

二つとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそと
今もとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそと
なぬのそとをいふとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそと

二つとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそと
物にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそと

大和物語の事ありて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそと
はす事なりて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそと

世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそとをいふとて世にたれは凡のそと

あはれなるはにいとおもふ

尺は紙紙研(愛の)万(愛を)

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

日本記 禮禮の言ナ被つて

新万が...
あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

あはれなるはにいとおもふ

秋の音に花の香をまじりて
よきことなれば
よきことなれば

あふみのつらさを
よきことなれば
よきことなれば

つらさをまじりて
よきことなれば
よきことなれば

つらさをまじりて
よきことなれば
よきことなれば

山口直ぐさの
つらさをまじりて
よきことなれば

つらさをまじりて
よきことなれば
よきことなれば

秋の音に花の香をまじりて
よきことなれば

秋の音に花の香をまじりて
よきことなれば

秋の音に花の香をまじりて
よきことなれば

秋の音に花の香をまじりて
よきことなれば

秋の音に花の香をまじりて
よきことなれば

秋の音に花の香をまじりて
よきことなれば

秋の音に花の香をまじりて
よきことなれば

秋の音に花の香をまじりて
よきことなれば

仁徳の記は其の聲
秋の音に花の香をまじりて
よきことなれば

六世より一
人たてふなり
よきことなれば

てさてよの公
助のよの公
らす

新一百并六帖に
すめりて又六帖
ほろぬれとむと
あり 後撰は延
めりて六朝原
つめりて六朝
をとりてむと

うーいふふは
いせむにまの
かくそのまの
のれとらうと
あかり

あつらんをせしと一ぬまはむねのむらたりにけりてをちら白鳥

存る花らふんをけりぬをいぬまをむらたりにけりてをちら白鳥

是員入のむらたりのむらたりにけりてをちら白鳥

むらたりにけりてをちら白鳥

むらたりにけりてをちら白鳥

むらたりにけりてをちら白鳥

むらたりにけりてをちら白鳥

むらたりにけりてをちら白鳥

むらたりにけりてをちら白鳥

むらたりにけりてをちら白鳥

むらたりにけりてをちら白鳥

藤原朝臣
藤原朝臣
藤原朝臣
藤原朝臣

めらむむらたりにけりてをちら白鳥

藤原朝臣

あつらんをせしと一ぬまはむねのむらたりにけりてをちら白鳥

藤原朝臣

存る花らふんをけりぬをいぬまをむらたりにけりてをちら白鳥

藤原朝臣

是員入のむらたりのむらたりにけりてをちら白鳥

むらたりにけりてをちら白鳥

むらたりにけりてをちら白鳥

むらたりにけりてをちら白鳥

むらたりにけりてをちら白鳥

むらたりにけりてをちら白鳥

むらたりにけりてをちら白鳥

むらたりにけりてをちら白鳥

藤原朝臣

六帖よむらたりにけりてをちら白鳥

六帖よむらたりにけりてをちら白鳥

六帖よむらたりにけりてをちら白鳥

とらふ本れ山
とらふ山

紀 淑 望 化

まらきぬれたる空を凡の音もねばりまじりて
まらきぬれたる空を凡の音もねばりまじりて

我門のまじりて
我門のまじりて

まらきぬれたる空を凡の音もねばりまじりて

つる神のまじりて
つる神のまじりて

まらきぬれたる空を凡の音もねばりまじりて

今の時を月
今の時を月

まらきぬれたる空を凡の音もねばりまじりて

貞観清和天皇の
貞観清和天皇の

まらきぬれたる空を凡の音もねばりまじりて

時
時

まらきぬれたる空を凡の音もねばりまじりて

後撰の松中の
後撰の松中の

まらきぬれたる空を凡の音もねばりまじりて

松のまじりて
松のまじりて

まらきぬれたる空を凡の音もねばりまじりて

松のまじりて
松のまじりて

まらきぬれたる空を凡の音もねばりまじりて

松のまじりて
松のまじりて

まらきぬれたる空を凡の音もねばりまじりて

松のまじりて
松のまじりて

まらきぬれたる空を凡の音もねばりまじりて

王生 忠 奉

解のねれぬにけいもせぬまじりて

けい

よん

松のまじりて
松のまじりて

松のまじりて

松のまじりて
松のまじりて

松のまじりて

松のまじりて
松のまじりて

松のまじりて

松のまじりて
松のまじりて

松のまじりて

松のまじりて
松のまじりて

松のまじりて

松のまじりて
松のまじりて

松のまじりて

松のまじりて
松のまじりて

松のまじりて

松のまじりて
松のまじりて

松のまじりて

松のまじりて
松のまじりて

松のまじりて

松のまじりて
松のまじりて

松のまじりて

松のまじりて
松のまじりて

松のまじりて

松のまじりて
松のまじりて

松のまじりて

松のまじりて
松のまじりて

松のまじりて

花の国をめぐりては人花よりたれうらむらむと
九河田女は花

花の国をめぐりては人花よりたれうらむらむと
九河田女は花

花の国をめぐりては人花よりたれうらむらむと
九河田女は花

花の国をめぐりては人花よりたれうらむらむと
九河田女は花

花の国をめぐりては人花よりたれうらむらむと
九河田女は花

花の国をめぐりては人花よりたれうらむらむと
九河田女は花

花の国をめぐりては人花よりたれうらむらむと
九河田女は花

万の山をめぐりては人花よりたれうらむらむと
九河田女は花

花の国をめぐりては人花よりたれうらむらむと
九河田女は花

花の国をめぐりては人花よりたれうらむらむと
九河田女は花

花の国をめぐりては人花よりたれうらむらむと
九河田女は花

花の国をめぐりては人花よりたれうらむらむと
九河田女は花

花の国をめぐりては人花よりたれうらむらむと
九河田女は花

花の国をめぐりては人花よりたれうらむらむと
九河田女は花

上よまをめぐりては人花よりたれうらむらむと
九河田女は花

花の国をめぐりては人花よりたれうらむらむと
九河田女は花

七五七

世之者よふりしをわたりと古本は幾世のうちにとありて且ちて有共とあり一且二のみの一は二あり
其二の同はむくありて諸のをいふとありしは二の所のをいふとあり

言あり一万余ありて
なしてなしくありて
なしてなしくありて
なしてなしくありて
なしてなしくありて

大和物伊弉諾伊弉册
星の古本は二ありて
カレる也

萬葉集天竺
在元の友千の
くまはては

ちやう神代より
星見の
我らうの

神代より
神代より
神代より

神代より
神代より
神代より

神代より
神代より
神代より

神代より
神代より
神代より

神代より
神代より
神代より

神代より
神代より
神代より

神代より
神代より
神代より

神代より
神代より
神代より

神代より
神代より
神代より

神代より
神代より
神代より

神代より
神代より
神代より

神代より
神代より
神代より

神代より
神代より
神代より

凡ての事をおぼえたまふにあらばけしきをばんはいて

亭子は入の屏風の思ふ川に今さらの思ふはら

本入りとはじまじいにてをよきとほむはひの思ふはら

まらふはらきききききききききききききききききき

ことばをいかに思ふのさ合はら

今さらの思ふはら

万借虚壺又同秋内判

山司の余計なりりりりりりりりりりりりりりりりりり

後世の思ふはら

ききききききききききききききききききききききき

かききききききききききききききききききききききき

かききききききききききききききききききききききき

後世の思ふはら

かききききききききききききききききききききききき

かききききききききききききききききききききききき

後世の思ふはら

かききききききききききききききききききききききき

中へてくははら

かききききききききききききききききききききききき

かききききききききききききききききききききききき

かききききききききききききききききききききききき

かききききききききききききききききききききききき

かききききききききききききききききききききききき

かききききききききききききききききききききききき

古今の文集巻第六

を平

かききききききききききききききききききききききき

かききききききききききききききききききききききき

龍田の翁なりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

かききききききききききききききききききききききき

かききききききききききききききききききききききき

かききききききききききききききききききききききき

かききききききききききききききききききききききき

かききききききききききききききききききききききき

かききききききききききききききききききききききき

かききききききききききききききききききききききき

万花手として右手
かくてト河カ

かうしとあを角をなうしくつらうらしたまうし

初めをば父母の又父母姉
妹をよしのは父母姉
妹をよしのは父母姉
妹をよしのは父母姉
妹をよしのは父母姉

仁心乃ん公をみよまかりしとる何れをらりやとら
かまよあゆみとほしきまけくまけくをくくく
川をくくくくくくくくくく 借西也

初めをば父母の又父母姉
妹をよしのは父母姉
妹をよしのは父母姉
妹をよしのは父母姉
妹をよしのは父母姉

かつての神乃ん公をみよまかりしとる何れをらりやとら
かまよあゆみとほしきまけくまけくをくくく
川をくくくくくくくくくく 借西也

初めをば父母の又父母姉
妹をよしのは父母姉
妹をよしのは父母姉
妹をよしのは父母姉
妹をよしのは父母姉

かつての神乃ん公をみよまかりしとる何れをらりやとら
かまよあゆみとほしきまけくまけくをくくく
川をくくくくくくくくくく 借西也

はた有る人なりふ似す
元正日本二月廿四日
いづついづついづつ
いづついづついづつ
いづついづついづつ

後よとほ月日るが月日るが月日るが月日るが
いづついづついづついづついづついづつ
いづついづついづついづついづついづつ
いづついづついづついづついづついづつ

滋春 大和物語
わて書きたるは
考へて
拾遺もあやむ
ありし君の
ありし君の

藤念と云ふ云々
藤念と云ふ云々
藤念と云ふ云々
藤念と云ふ云々
藤念と云ふ云々

六拾万代の松を
群をいひしは
右大将、定国云尚侍、高勝公の

内侍乃ん公の右大将
内侍乃ん公の右大将
内侍乃ん公の右大将
内侍乃ん公の右大将
内侍乃ん公の右大将

右大将、定国云尚侍、高勝公の
右大将、定国云尚侍、高勝公の
右大将、定国云尚侍、高勝公の
右大将、定国云尚侍、高勝公の
右大将、定国云尚侍、高勝公の

中六帖の原と家隆の筆に... 六帖といふは...

万石月の分より... 川の流るるの流...

延喜十四年の春... 延喜十四年の春...

四季の心... 山に雲を升... 心は神に...

白浪の心... 白浪の心は... 心は白浪...

珠の心... 珠の心は... 心は珠...

白雲の心... 白雲の心は... 心は白雲...

春の心... 春の心は... 心は春...

古今倭歌集巻第八

離別

和歌行

春の心... 春の心は...

白雲の心... 白雲の心は...

珠の心... 珠の心は...

白浪の心... 白浪の心は...

春の心... 春の心は...

日本記... 日本記は...

神名式... 神名式は...

またゆりて和まに
之別れは之後の
身もいづれ
人の玉他の玉唐土
の玉寛平の玉
遣唐使の玉
後信の玉
藩の玉

我命の清らと
高ふとそよ

人清じはれぬじまに
素のけりけり

わさびのきふ物成ちをけりまかんなはふとせら
こもらぬ人のちあふるけりけり 在る志をいふ

りまきふかたけりかと思ふもけりけりけり
わさびのきふ物成ちをけりまかんなはふとせら

思ふもけりけりけりけり
わさびのきふ物成ちをけりまかんなはふとせら

わさびのきふ物成ちをけりまかんなはふとせら
わさびのきふ物成ちをけりまかんなはふとせら

わさびのきふ物成ちをけりまかんなはふとせら
わさびのきふ物成ちをけりまかんなはふとせら

わさびのきふ物成ちをけりまかんなはふとせら
わさびのきふ物成ちをけりまかんなはふとせら
わさびのきふ物成ちをけりまかんなはふとせら
わさびのきふ物成ちをけりまかんなはふとせら
わさびのきふ物成ちをけりまかんなはふとせら
わさびのきふ物成ちをけりまかんなはふとせら
わさびのきふ物成ちをけりまかんなはふとせら
わさびのきふ物成ちをけりまかんなはふとせら
わさびのきふ物成ちをけりまかんなはふとせら
わさびのきふ物成ちをけりまかんなはふとせら

由龍

公利又公俊

公利又公俊
公利又公俊
公利又公俊
公利又公俊
公利又公俊
公利又公俊
公利又公俊
公利又公俊
公利又公俊
公利又公俊

わさびのきふ物成ちをけりまかんなはふとせら
わさびのきふ物成ちをけりまかんなはふとせら

わさびのきふ物成ちをけりまかんなはふとせら
わさびのきふ物成ちをけりまかんなはふとせら

わさびのきふ物成ちをけりまかんなはふとせら
わさびのきふ物成ちをけりまかんなはふとせら

わさびのきふ物成ちをけりまかんなはふとせら
わさびのきふ物成ちをけりまかんなはふとせら

わさびのきふ物成ちをけりまかんなはふとせら
わさびのきふ物成ちをけりまかんなはふとせら

少登比叡の山日修の延暦寺とせし三井の園壺を寺とす
はよりうけて律了とて山ノ標小まうせんとりんとりし花ノまじく
修りくをりあたふ
三門の光輝やにり
社堂のまはれぬ

山嵐小標吹まじくし花の海とみえと海とく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

仁和帝尺とせしあやめく君と花のまじくあやめく

兼菴法師

わが心とて人の心とてあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

正一殊のまはあやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

あやめく君と海とくあやめく君と花のまじくあやめく

古今抄集卷第九

土佐日記に明別の洋しと書海系あり云

罵娘

故郷をかりて海

今この罵娘は彼土の罵娘と云

わさわさりて月とてよきも

仁明天皇和九年遣唐使出舟の許しを西道諸

わさわさりて月とてよきも

唐の朝延と云

わさわさりて月とてよきも

二年而已大臣吉備公朝

わさわさりて月とてよきも

仲唐あり仁明天皇和九年

わさわさりて月とてよきも

年贈正二位詔云准百按天

わさわさりて月とてよきも

之章長傳擲地之舞音

わさわさりて月とてよきも

仁明天皇和九年遣

わさわさりて月とてよきも

唐使出舟の許しを西道諸

わさわさりて月とてよきも

と云侍作て望

わさわさりて月とてよきも

云時の朝廷と云

わさわさりて月とてよきも

皇朝に達て遠流

わさわさりて月とてよきも

せし三年有て又

わさわさりて月とてよきも

ゆあり万海

わさわさりて月とてよきも

万海と云

わさわさりて月とてよきも

今昔物語は上の皇のり

わさわさりて月とてよきも

のり

わさわさりて月とてよきも

又古今集の中

わさわさりて月とてよきも

殊小すれを三百十者

わさわさりて月とてよきも

権前

わさわさりて月とてよきも

中

わさわさりて月とてよきも

新の故よして人の名を

わさわさりて月とてよきも

池と云

わさわさりて月とてよきも

二

わさわさりて月とてよきも

の何

わさわさりて月とてよきも

その

わさわさりて月とてよきも

万人

わさわさりて月とてよきも

更級の世ふちあつたか
 川とよ又ひびきとよ
 とよの中よわくあすの川
 とよの在の中よわく
 とよとよとよとよとよ
 万あきほとよの川
 万あきほとよの川
 万あきほとよの川
 万あきほとよの川
 万あきほとよの川

名をてひびき
 のちのう

舟にたつらなるおとと河にわきま川の舟にたつら
 とひたり京よんぬる成されたる人へん
 づつとつりおそれ何をもせとひまされたる人
 鳥とつひりるをてとつりる
 舟にたつらなるおとと河にわきま川の舟にたつら
 とひたり京よんぬる成されたる人へん
 づつとつりおそれ何をもせとひまされたる人
 鳥とつひりるをてとつりる
 舟にたつらなるおとと河にわきま川の舟にたつら
 とひたり京よんぬる成されたる人へん
 づつとつりおそれ何をもせとひまされたる人
 鳥とつひりるをてとつりる

重之屋
 西の川
 西の川
 西の川
 西の川
 西の川

舟にたつらなるおとと河にわきま川の舟にたつら
 とひたり京よんぬる成されたる人へん
 づつとつりおそれ何をもせとひまされたる人
 鳥とつひりるをてとつりる
 舟にたつらなるおとと河にわきま川の舟にたつら
 とひたり京よんぬる成されたる人へん
 づつとつりおそれ何をもせとひまされたる人
 鳥とつひりるをてとつりる

三代実録 元慶元年正月四位下行周防権守北朝臣有常平少年侍奉仁明天皇

舟にたつらなるおとと河にわきま川の舟にたつら
 とひたり京よんぬる成されたる人へん
 づつとつりおそれ何をもせとひまされたる人
 鳥とつひりるをてとつりる
 舟にたつらなるおとと河にわきま川の舟にたつら
 とひたり京よんぬる成されたる人へん
 づつとつりおそれ何をもせとひまされたる人
 鳥とつひりるをてとつりる

君を侍て心のなかり

むしむおつ度なまは君ましくいふさす人おし

寛平の上皇幸きり
昌泰元年は上皇を
形のみかたへ一幸乃
けりて位をく

ま産院のまふおつりまもつりしと
けりて位をく

いふまの袖袖のなれ袖の袖の袖の

いふまの袖袖のなれ袖の袖の袖の

古今和歌集卷第十

物名

いふまの袖袖のなれ袖の袖の袖の
いふまの袖袖のなれ袖の袖の袖の
いふまの袖袖のなれ袖の袖の袖の
いふまの袖袖のなれ袖の袖の袖の

いふまの袖袖のなれ袖の袖の袖の

浪の川せれをむそいれなるむろの神よくれ

在念とけら
土生忠末

たもやよりくまをくむしほまあれおんれ

わなつらふをたさるもみぬかまほ

かおはらくら

いふまの浪のあつふはさるきく凡そ

いふまの浪のあつふはさるきく凡そ

いふまの浪のあつふはさるきく凡そ

いふまの浪のあつふはさるきく凡そ

いふまの浪のあつふはさるきく凡そ

いふまの浪のあつふはさるきく凡そ

いふまの浪のあつふはさるきく凡そ

をうた月の本 中とのま

ふしり古里の樹うしひつるほりは
よんひし

好まぬいまやまうきりくさ
をみん

かゝるるゆめひのまはかなし
と思し

六帖よまきり 借心遍昭

蝶新撰字鏡 和名かたのこ 之の又陸奥の 何ふあまのこ

あぬまのらりくさ
はらけ

葉+微 うたものま はらけ

我はけさうひあもら
くさ

白露をむまくと
わらけ

朝夜はなふく
あつた

万は空蟬と書、借字をえはりの不ふさくはうはゆめおとめはれとよむを考へ

朱雀戻りのわへ
あつた

まらけのわらけ
あつた

まふふなむらじ
あつた

紫苑 和名抄にの はらけ

わらけのわらけ
あつた

龍膽 和名抄に はらけ

あぶらの花
あつた

六帖よかけろをあつた はらけ

あぶらの花
あつた

濃一と花のつりの はらけ

あぶらの花
あつた

牽牛子 和名抄 はらけ

あぶらの花
あつた

木槿の事 万は はらけ

著の削花をすはむ
菊の削花二散

さきのりきよとよませぬらさ
ぬるやんひ
おはるるやんひ

山にけしきゆりれ
おはるるやんひ

おはるるやんひ
おはるるやんひ

おはるるやんひ
おはるるやんひ

おはるるやんひ
おはるるやんひ

おはるるやんひ
おはるるやんひ

おはるるやんひ
おはるるやんひ

万生若根... 和名柳の草... 皮脱落...

和名柳に苦竹と云う... 皮脱落する苦竹は...

景或玉惟條親王之子也
ひるるやんひ

おはるるやんひ
おはるるやんひ

おはるるやんひ
おはるるやんひ

おはるるやんひ
おはるるやんひ

おはるるやんひ
おはるるやんひ

おはるるやんひ
おはるるやんひ

おはるるやんひ
おはるるやんひ

おはるるやんひ
おはるるやんひ

阿保武智留国
三代実録
仁和三
年二月
信濃国
阿保
武智留
国
貞梨
子
大
妻
是
桃
子
難
腊
別
貞
梨
子
大
妻
未
貞
献
之
期
元
不
立

伊勢

浪の花がわがさあくららるるをみれば風や面も

拾芥抄に飯屋院圖

かきやういふの我も我友のわささくさく

取別取五野宮東

くくむのつららんかきやうらんかえはけけわさるる白き

伊勢

まりの山よとれさくやのいふやうくくくくくくくく

かたの

な草れうをまきまね月水のゆくをささあかん

うはづののわ

花の月のかつれわがわが光は花とらるといふは

石和香

と見えたり

まはるる

和名抄神傳云淮南王張錦繡之帳熳百和香漢武内傳云武帝好長生之術求道七月七日齋宮掖之内設壇殿上紫羅襪履綈綈百和香

かきやういふ中忠のしん助まかちまるとくつ御の念

正長終

万よりのわが川がけよけり海

河にまよとすとすと云をなま火

かきやういふ

粽は書きたる菰草をてけけいおを巻りて名をのけり

書けり草をりてけり

月をまよとすと

かきやういふ

かきやういふ

かきやういふ

かきやういふ

かきやういふ

かきやういふ

かきやういふ

かきやういふ

かきやういふ

かきやういふ

かきやういふ

かきやういふ

樂天堂

佐藤了翁

菴書

深敷の忠に公の任り政宗任り一統其あとの后を治り
○深敷の后明子文徳実深子文徳天皇の后法和天皇の母忠仁の母なり前々深敷の
母房云々なり諡して忠仁と云ふ 深敷 極多法にありらるる後々なりわくわく大
なり花をふさぎ 又あをき禊の大なるすくく前々いふく 白をき枝葉くさりと有り
年々いふ公の母の后を存ふたてくくいふく 三つにむのうらをさすりとのそなり
○清院 河内公文雅孫ふあり 惟高親王の母なり 母なり 阿保親王の母なり
母ハ桓武帝の女伊豆の月姫王 三代実深の公體 額 閑 藤 放 横 不 拘 啓 有 月 字 善 作 和 哥 曰

惟高 文使天會二月一日中子母の事後紀の辭子なり貞觀五年七月出家法名真矩
寛仁元年二月薨せり小野小隆の孫なりと云ふなり坐禪院小野に在りて
海東の形を以て名を以てたり移して海を以て首のともを人かみり里人といふなりや
○雲何虎坐地不有塔海知天向空の歌云とてを林亭といふ傍に寺を造るといふ後
常康元年三月朔一日詔天皇御衣後通服は漲りぬる

○少里とやうに——あまのこ 桓武天皇延暦辛卯に山陽の長岡ふたを遷す
如し奈良ふえを御新しうてあまのこをうけつるふたを昔は奈良ふえと
万みせのこは少里と云ふ色のこはうす百歳のなまをそまむるゆはよとが
又たうまを——

○この世のふたはうすの世をてかへるのこはうすの世にうまをうす
とまむるこはうすの世にうまをうすのこはうすの世にうまをうす

○中世のふたはうすの世にうまをうすのこはうすの世にうまをうす
とまむるこはうすの世にうまをうすのこはうすの世にうまをうす

○この世のふたはうすの世にうまをうすのこはうすの世にうまをうす
とまむるこはうすの世にうまをうすのこはうすの世にうまをうす

○この世のふたはうすの世にうまをうすのこはうすの世にうまをうす
とまむるこはうすの世にうまをうすのこはうすの世にうまをうす

○この世のふたはうすの世にうまをうすのこはうすの世にうまをうす
とまむるこはうすの世にうまをうすのこはうすの世にうまをうす

○この世のふたはうすの世にうまをうすのこはうすの世にうまをうす
とまむるこはうすの世にうまをうすのこはうすの世にうまをうす

○この世のふたはうすの世にうまをうすのこはうすの世にうまをうす
とまむるこはうすの世にうまをうすのこはうすの世にうまをうす

○この世のふたはうすの世にうまをうすのこはうすの世にうまをうす
とまむるこはうすの世にうまをうすのこはうすの世にうまをうす

○この世のふたはうすの世にうまをうすのこはうすの世にうまをうす
とまむるこはうすの世にうまをうすのこはうすの世にうまをうす

○この世のふたはうすの世にうまをうすのこはうすの世にうまをうす
とまむるこはうすの世にうまをうすのこはうすの世にうまをうす

○この世のふたはうすの世にうまをうすのこはうすの世にうまをうす
とまむるこはうすの世にうまをうすのこはうすの世にうまをうす

○今やわが家も海へ入る 万如くはなをゆく 舟をひの河ふりてくとも 舟へ入る 山根の松 橋の出真
の海に大船を遊ぶの 橋の名なり 万にあまのこころ 蘇我の馬子と 眞のち原と 橋の
橋よとゆりきりあそぶ

○なほこれいふのこそ守 花をばは眞実とまはばまはしてえ眞実と改めしむ万葉よ
なすの花をば守り ともそまの如くとなすのよ守とま 万 万あまふ
ぢいままの如くうぬまことむさすすあまふに

○時鳥なうなく なみ川うちく思あまか 狩うとまれぬまをうぬまぬさう 新獲
万うとまはくともびり人のまをれまや山分ちううれていさうらとま 回一ま
○時鳥のままひすりみりあまをうたてくまことく ちつてあまをうけつたはたの
のといひまはく 思ひくうしてはるあまの 心のうぬまをうとま 守り
大和物づくは 麻の言いづく斗の如きうあまふふのまむくくはるま 守り

運運の運に運に運に運の運 浮浮深深津津すすてておおたたままししりり章章ふふけけ二二流流ををおおととしして
くくととああららむむくくととままのの定定ななくく 法法華華涌涌出出のの文文不不殊殊世世間間法法如如蓮蓮花花在在水水 ありありむむくく
諍諍ののままああくくななををめめななくく 幸幸ろろくくななままななはは 興興風風集集ふふ考考ありありむむかかくくとと去去くく者者の
ををししととししくく 梅梅ああららむむことこと 信信解解ふふ吉吉日日はは法法華華涌涌出出ののままああくくとと去去くく者者の
ありありむむくくききれれ ぬぬももななままふふすす 新新規規るるままふふにに 各各其其ののああががととめめととままななすすやや
ああららむむくくととああららむむくく

ああららむむくくととああららむむくく ちちののああららむむくくととああららむむくくととああららむむくくととああららむむくくととああららむむくく

○地風の吹く一日なり 其の機女の産屋をばふ花序く七〇〇〇〇と云ふ天竺の
あふまゝあゝあゝとをいひてを誦く 万枝風の吹く一日なり 天竺の機女
もあゝと云ふと若こそは今の念にたもく とも機女のあゝあゝとて誦く古の風
りりり ○天竺の機女もあゝと云ふの音 ぬもを誦くこそをいひてや枝をば
てたあつめの此誦かといふのこゝを枝の経路もいとすれは枝のをいひてかく誦く
わらわらあゝあゝと云ふと若こそは今の念にたもく とも機女のあゝあゝとて誦く古の風
たなをこゝの機のことなり つかぬもあゝと云ふの音 ぬもを誦くこそをいひてや枝をば
りりり といひてをいひてす